

ど、具体的な数字を挙げられました。

ところが、この発表があったとき、最近の武漢市の水汚染の問題で新聞ネタになったものが1つあります。「だから、そんなにうまくいっているわけでもないのです」という話もありました。

日中環境協力については、宋先生が日本の事情もよくご存じですので、その立場からお話をいただきました。柳下先生は環境省におられて、具体的に環境政策の立案もされ、その後の日中環境協力の日本側の代表者でもいらっしゃいましたので、そういうテーマでお話をいただきました。

柳下先生の結論は、日中の環境協力は新たな段階に入ったということです。具体的に言えば、これからはODA（Official Development Assistance：政府開発援助）で環境協力をするのではなく、水平協力、対等な立場で中国の環境をよくする方向に向かっていく段階に入ったのではないかという話でした。

これで全部です。

初日の私の発表のときに、「日本人が中国の環境の研究をして中国の環境改善にどのように貢献するのか」と、フロアの南開大学の楊先生から質問がありました。私たちは、具体的に中国の環境がよくなる仕掛けをしたいと考えています。12月15日、16日の会議のあと、何人かのグループは南京へ移動します。南京の秦淮河（シンワイガ）という河、内河と外河がありますが、南京大学の人たちと江蘇省の環境担当者の方と協力して、三者で「文」と「理」の側から知恵を出し合って、その河の水をきれいにするにはどのような方法があり得るか討論しようと計画をしています。そのように行動を伴うことを前提に研究をしております。これで終わらせていただきます。



●司会― 榎根先生、どうもありがとうございました。それでは、方法論のコメントを加々美先生からお願いします。

◆分科会コメント①◆

「中国学と現代中国学構築」研究会コメント

加々美光行

<愛知大学>

先ほど、金観涛先生に大変素晴らしいまとめをしていただきましたので、昨日の討論セッションでどのような討論がなされたかは、あれで十分ついていると思います。私が問題を出したからといって、必ずしもそれに沿って討論されたわけではありませんが、私の印象と問題提起

が皆さんの間でどのようなかたちになったのかをお話したいと思います。

シンポジウム初日のセッションで、榎根さんから環境問題の方法論の図式（パワーポイント）を使って示されました。それについて、私から当日にコメントすることができませんでしたので、方法論分科会では取り上げさせて貰いました。

認識論と実在論、存在論と言ってもいいでしょうか。存在論のことを中国語で、本体論（bentilun）、あるいは存在論（cunzailun）と言います。この2つの側面について、方法論では必ずしも難しい哲学的議論をするのではなく、視覚、視座（viewpoint）の問題としてきちんと確立しておかなければなりません。

どちらかという、榎根さんの出された図式は認識論的な問題です。実在論的、存在論的な軸が希薄だと私は思っていますが、決して批判ではありません。基本的に何かを付け加えなければならないかという意味です。どこが問題かと言いますと、時間軸、空間軸の二つの軸の関係性が明らかでないということです。金観濤先生は、横軸、縦軸、あるいは、横線（hengxian）、縦線（zongxian）と表現されました。実は、この問題が存在論的に重要なのです。

特に、これからお話するのは、時間軸の問題、空間軸の問題、存在論のほうの問題になります。時間軸とは歴史の軸です。例えば、政治セッションでは、文化大革命、毛沢東時代から現在の改革開放へ、鄧小平時代から今の胡錦濤政権の時代へと、時代が大きく変わってきます。さらに、国内的な時間軸だけではなく、国際社会における時間軸も、冷戦時代からポスト冷戦時代、そして、9・11テロ事件以降、イラク戦争以降といった時代変化があります。そうした時代変化の中で、中国社会の内部の関係性と構造がどう変化し、また国際社会の関係性と構造がどのように変わったか。そうした問題がつまり縦軸（空間軸）の問題になります。

何が問題になるかという、この時間軸の問題、空間軸の存在論の問題と、主客合一を目指す認識論の問題を、どのようにつなげていくかということなのです。

認識論において日本人としての主体と、研究対象としての中国である客体を、ばらばらに切り離した方法論では決定的に誤りが生じます。バードウォッチングと同じようにウォッチング（観察）する方法、あるいは、日本側から一方的に中国に働きかけるという一方向的な認識論。これは根本的にオリエンタリズムに代表される認識論上の歪みを決定的にもたらしてきました。存在論が認識論に大きな歪みをもたらしたという意味でもっとも良い例がオリエンタリズムなのです。

溝口先生は、認識論と実体論、存在論が深くかかわるという姿勢から問題提起をされました。どこが問題なのかという、時間軸で言えば、溝口さんは戦前にお生まれになり、少年時代に戦争を経験して、戦後に大学にお入りになられ中国研究に携われました。これは、彼の個人史における、そういう意味では、榎根さんのいえば「I（私）」です。認識論の「I」の部分で、実は縦軸的に時間を経過してこんにちに至っておられます。

私は敗戦直前の1944年に生まれましたので、溝口さんは私の一番上の兄よりもお年です。ですから、世代のギャップはありますが共有する部分もあります。でも、世代という時間軸が、存在論としては文字どおり溝口さんの存在を規定しています。それがまた溝口さんの認識に、視座に大きな影響を及ぼしています。そのようなかたちで、個々の研究者は中国に対するそれぞれ違う方法的な姿勢を持つこととなります。

私は溝口さんと同じ時代を共有しませんでした。つまり戦前、戦中の時代については溝口さんと共有していないという意味では、多くのものを溝口さんから教えられました。それゆえに、

方法論的に見れば、時間軸において異なる時間を抱えた存在である研究者が相互に対話を進めていかなければなりません。

同時に、それは空間的にも広がりを持っています。例えば、フューラーさんのようにオーストリアに生まれて、イギリスへ中国へと行き、ヨーロッパから研究課題として中国を目指していくという方にも、同じように時間軸と、さらには私たちが立っている、この東アジア、日本という世界とは違う空間からものを見ていく問題の立て方が現れてきます。

このようにまず研究主体の側から見るだけでも、時間軸、空間軸を無視しては方法論は成り立ちません。つまり、それぞれの研究者の持っている存在が、時間、空間においてどのような制約を持ってきたのかという問題です。

それから、方法論分科会で非常に示唆的なことが出ました。金観涛先生と劉青峰先生の膨大なデータベースによる新たな研究方法の提起です。これは 1830 年から 1930 年に至る 100 年間について、それにかかわる膨大な文献資料、原本を全部データベース化して、そのなかから、例えば、「革命」「民主」など、随意にキーワードを拾い上げて、それがいつの時代から用いられ、当初はどのような意味を持ち、それがどのような変遷を経てきたのかを明らかにするという方法です。

金観涛先生は、これが研究における主客合一をめぐる認識論で問題になる研究の客観性という問題に深くかかわっていることを冒頭でお話になりました。確かにこれは、データベースによって、はっきり文献的に確証も取れるものとして一つひとつの概念の意味の変遷が取り上げられます。

例えば、「日本の歴史」という言い方をします。しかし、日本という概念が、いつ、どこで、どのような意味において最初に用いられ、それがこんにちに至るまで、どのような意味の変容を経てきたかをまったく論じないで日本の古代史、中世史を扱う歴史家もたくさんいます。例えば、民族 (national, nation) という概念についてですが、中国では梁啓超が初めに使いました。日本では、早稲田大学をつくった大隈重信が最初に使ったという説もあります。しかし、これもあやふやです。本当はしっかりとデータベースで確認を取らなければいけないのです。こういうことは従来おこなわれていませんでした。それはいわば観念史とも呼べるものですが、単なる観念史の方法ではなく、一つ一つの観念 (コンセプト) が具体的で実在する歴史の中でどのような変遷を遂げてきたかを問うという意味では、認識論と存在論をつなぐ方法と言ってよいのです。

ただ、金観涛先生に提案をしたのは、同様のデータベースを日本でも、韓国でも、東南アジアでも、さらに、ヨーロッパ、アメリカでも、世界中につくることです。

アメリカで、例えばデモクラシー (democracy) という言葉がいつ誕生し、当初に意味付けられていたものが、こんにちどのように意味を変えてきたのか。それが時間的にいつの時代にどのような意味合いを持って、日本やアジアに伝えられたのか、データベースを空間的に拡張することによって、確実にその基礎が生まれてきます。

これが方法論的には、地球軸という空間軸のなかにおいてデータベース構築をしていくことです。もちろん、金観涛先生や劉青峰先生は歴史家、歴史学ですから、データベース自体が縦軸によって形成されています。縦軸のものを横に広げていくことによって、大幅に研究の客観性が改善されます。

この点についてはあまり多く語らず、ひと言だけ申します。私は毛里和子さんと、1986 年ま

で文化大革命の共同研究をしてきました。しかし、1986年から1987年にかけて、方法論的な見解の違いから袂を分かちました。

そのときにどのような問題があったかという、毛沢東がいつどこで何を考えたか、という観念の世界を私は事実として扱いました。毛里さんは、事実はむしろそういうものではないのだと主張されたわけです。しかし、金観涛先生が扱った観念史の方法は、まさにいつどこで誰がどのような意味合いで、ある言葉、キーワードを使い始めたかという問題とかかわるのです。観念の歴史です。そのようにしてとらえられた観念とは、事実なのです。溝口さんが最初に問題にされたのですが、歴史としての近代と思想としての近代とは、当然、交差しなければいけないというのも、そういうことなのです。

どのような意味で、あるキーワード、言語、ディスコース (discourse) が用いられ始めたのか、しかもそれはいつの時代であって、そのときにどのような世界的状況があったのか、同時代としてどのような空間的状況が存在していたのかを深めていかなければなりません。

その点では、最後に1つだけ、方法論セッションで極めて刺激的な問題提起をした劉新さんに、私は感謝したいと思います。

劉新さんは、最初は非常に曖昧に問題を述べられました。1990年代半ばから何かが決定的に違うようになったと言われました。何が違うのかよくわかりません。彼があとでコメントしたのは、ディスコースの構造が変わったということです。つまり、使われる言語の意味が転換したということです。意味の転換は何によって起きたのか、と私は彼に質問しました。それは、空間軸と時間軸が大きく変化し始めているということです。1995年を境に確かに言語構造が変化し始めました。その意味を問うということです。

これも方法論においては極めて重要です。私たちに直接に、現実に降りかかっている問題として、むしろ1995年は私たちと同時代です。しかし、その同時代に、実は歴史的な時間軸と世界的な空間軸の流れでディスコースの構造は変わってきているのです。

実は、政治分科会でも、私はこの時間軸、空間軸というこの方法によって問題を解き明かしてほしいと申し上げました。しかし、先ほど、朱光磊先生から報告があったように、政治分科会では、確かに十分には議論しきれなかった面があります。

しかし、方法論分科会では、このようなことははっきり問題にし得たのです。そういう意味では、金観涛先生が言ったように、一定の突破 (tupo) があったと、私は思っています。それはまだ非常に小さな一歩かもしれませんが、大変貴重な一歩としての突破があったと思っています。私のまとめはこのくらいです。どうもありがとうございます。



●司会— どうもありがとうございました。続きまして、政治のコメントを慶應義塾大学の小島先生にお願いします。